

花柳小説家・田村西男

——滑稽文芸雑誌『笑』にみる〈花柳小説〉——

大城 文美

はじめに

森銑三の著作に「田村西男氏の作品」という小品がある。この作品は、森銑三が一九五八（昭和三三）年一月二二日に死去した田村西男の訃報を聞いて、西男が存命の時から文壇で評価されず、さらに西男の追悼記事すら載せる雑誌がなかったことを寂しく思い、「この際私だけの一文を書いて見たい」と思い立って書かれたものである。この追悼記事では、終始西男に対する賛美の言葉で埋められ、西男が花柳小説家として「名人の至芸」ともいえる境地に入っていたとまで賞賛している。続けて、西男の作品の特徴を、自然派作家と比較して以下のように述べている。

田村氏の描く芸者は少し美化せられ過ぎてゐるかも

知れないが、それだけ作者の温かい気持が感ぜられて、読んで快い。それでゐて少しも通人振つたり、都会人振つたりしないで、終始つつましやかに筆を進めてみられるのに好感が持たれる。その人がらのよさが、作品の上に流露してゐる。自然派作家の描く芸者は片端から拙いといふことは、以前から定評になつてゐるらしいが、さうかと思ふと田村氏の如き特殊な作家があつて、芸者らしい芸者を心往くばかり描出してゐるのである。^{〔一〕}

近世文学の研究に注力した森銑三は、西男が花柳界の諸事情に通じながらも、「つつましやか」に「芸者らしい芸者」を描き出す態度に、江戸時代の遊興の理念であつた「通」を見出していたようである。江戸の遊郭では「知識さえも

欠けていて、粗暴で性欲的な男が野暮」と蔑称され、吉原を舞台として極めて矮小な遊里文学であった江戸の洒落本が、そうした「野暮」で「半可通」な男の滑稽さや愚かさを描き出していた。¹²遊里を取材した洒落本が、正面から現実を取り上げるのではなく「きまりきった型の中での芸のこまかさ」¹³に関心があったのに対して、自然派作家が現実だと思われる事象を正面から取り上げようとした態度を、森銃三は「拙い」と感じていたのではないかと思われる。

一方で、吉田精一が『永井荷風』(一九四七・二二、八雲書店)の中で、永井荷風と岡鬼太郎の花柳小説を比較して、「荷風のものほもと野暮で、感傷や詠嘆の生地を示してゐる点で、鬼太郎ほどすつきりと洗練され切つた花柳風景ではないけれど、それだけに通人文学の小手先芸を離れて、根強い人生観照に立脚した、近代小説の面目をそなへてゐる」と評価している。荷風の「野暮」な態度は、むしろ江戸戯作的な「通人の小手先芸」を離れるきっかけとなり、洗練された《花柳小説》ではないからこそ「近代文学」として成立していた。明治・大正と時代が進むにつれて、江戸の「通」という理念は時代遅れとされ、江戸文化に親し

む《花柳小説》自体もまた、新鮮味のない文学であると認識されていたと思われる。

西男の作品のほとんどは《花柳小説》ではあるが、言文一致体で書かれ、難解で専門的な語句を用いられずに平易な文章で、また赤裸々な性描写もなく、多くの読者に読まれることを想定して執筆されていたであろうことが窺える。しかし、西男は盛んに執筆していた時期から時評にもあがらず、追悼の記事すら掲載する雑誌はなく、文壇に埋もれていた人物であった。その一方で、西鶴研究を中心に近世文学の第一人者であった森銃三に「名人の至芸」と言われしめ、明治・大正期にかけて芸者を書き続け、「芸者らしい芸者」を描き出すことを得意としていた作家でもあった。また、田村西男は《花柳小説》だけではなく、滑稽芸芸雑誌『笑』^笑(一九〇七・一〇・二〇創刊、光村合資会社)という雑誌の編輯兼発行を務め、硯友社出身の作家らと執筆活動を共にしている。では、この田村西男とは一体いかなる人物であったのか。本論では、田村西男に注目し、その経歴を明らかにしていきたい。さらに、西男が《花柳小説》、また『笑』の中で、どのような作品を手がけようとしていた

のか言及していききたい。

一 田村西男の経歴について

これまで田村西男は近代文学の研究対象とされず、西男に関する文献は極めて少ない。『日本近代文学大事典』によれば、一八七九（明治二二）年二月一日生まれ、一九五八（昭和三三）年一月二二日、満七八歳で死去。小説家、劇作家、劇評家として活躍した。本名は喜三郎、東京日本橋の生まれである。幼少期の記録は残っていないが、東京法学院（現・中央大学）を卒業している。¹⁴

西男は、一九〇一（明治三四）年十一月号の『少国民』、『小国民』として一八八九・七創刊、学館館に「賞状」が掲載された後、たびたび『少国民』で作品を発表し、以降文壇で活躍するようになる。一九〇三（明治三六）年一月四日付の『読売新聞』「懸賞短編小説」欄には、「三百円」が当選されている。一九〇七（明治四〇）年一〇月に滑稽文芸雑誌『笑』¹⁵を創刊し、花柳小説を担当・執筆した。西男は辰門館より花柳小説集『芸者』（一九一一・二）、『又芸者』（一

九一一・二）、『芸者新話』（一九二二・四）、『芸者五大噺』（一九二三・一）を発行し、以上の四作品は「田村西男君の四大傑作」と広告されている。『芸者』は第五版まで確認できており、一定の需要はある作家であったと言える。「明治文壇の一異才 現代式洒落本」と銘打たれ、口絵装画に浮世絵師である四代目鳥居清忠、口絵に浮世絵師の系譜をひく錦木清方を採用するなど、西男は「洒落本」を想起させる作品を多く手掛けていた。さらに『中央新聞』の演芸欄も担当し、毎日派文士劇や演芸通話会の文士劇で活躍、小説家よりも劇評論家として知られていたようである。¹⁷

青年期の西男は、尾崎紅葉の直門下「藻会」の会者であった。紅葉の日記「十千万堂日録」によれば、西男は一九〇一（明治三四）年二月一〇日に紅葉の門を叩いている。¹⁸西男はその翌日、二一になる歳であった。紅葉は、一九〇〇年末から門弟たちを集めて文学研修のための「月並会」を開いていたが、三四年の入門者増加に伴い「月並会」を「万文会」と改め、門弟たちのために雑誌『南枝北枝』を企画している。¹⁹西男も『南枝北枝』相談会に参加し、紅葉に原稿を提出していたが、発刊には至らなかった。翌一月には、

「万丈会」を「藻会」と改称し、新加盟の門人たちを参加させている。

この時期、紅葉の病患はかなり進行している。一八九九年頃から発症した胃病が、一九〇一年には「引続き胃病の為に御悩み採筆の気力も薄く日々客を避け机を離れて休養致居候^{1.0}」、「金色夜叉も終近く相成候に胃病の為ちよと休筆いたし居申候^{1.1}」と、原稿執筆すらままならない状態であった。入門希望者も「一々謝絶^{1.2}」するなど、「藻会」加入は決して容易いものではなかったようである。思わしくない体調の中、紅葉が西男たち門下生を受け入れ文学的指導を続けたのは、彼らに硯友社再興を期待する思いがあったからであろう。紅葉は「藻会」で最後の意気込みを示したが、病状悪化に伴い「藻会」は積極的な文学活動をなさずに立ち消えてしまった。

一九〇一（明治三四）年に加入した「藻会」の門下生の代表として、ロシア文学翻訳で異彩を放った瀬沼夏葉や、俳人として一家をなした星野友人を挙げることができる。特に夏葉は、「有望なる女弟子」と紅葉に言わしめ^{1.3}、女性門下生の中で唯一「葉」の号を紅葉から与えられている^{1.4}。入門

から一年後には、紅葉と共訳でツルゲーネフやチェーホフの翻訳作品発表の機会を与えられ^{1.5}、紅葉が熱心に指導していた様子が窺える。紅葉の病患の進行具合と、日記や書簡を鑑みるに、晩年最も力を入れて指導していた門下生であったのではないだろうか。しかし、その夏葉の作品ですら近代文学における先駆的意義と影響はなく、「藻会」を先導する人物とはならなかった。西男もまた、最後の紅葉門下生であったと言えるが、この時期「藻会」唯一の文学活動であった『南枝北枝』計画も結局は実行されず、夏葉と比べてみると紅葉の手厚い指導はほとんどなかったと思われる。

しかし、西男の硯友社における地位は低いものであったとは言い難い。江見水蔭の回顧録『自己中心明治文壇史』では、一九〇一（明治三四）年に開催された硯友社新年会の様子が描かれているが、紅葉側の参列者として西男の名前が確認できる^{1.6}。当時数百人いたと言われる硯友社社員の中から、西男は小栗風葉、柳川春葉、泉鏡花、徳田秋声の牛門四天王と共に名前を連ねている。また一九〇三（明治三六）年一月二四日に博文館から発行された合集『換葉篇』

で、西男は執筆の機会が与えられている。『換葉篇』は、紅葉の指導のもと、一四名の十万堂門下生の作品が収録されている。この六日後、一〇月三〇日に紅葉は息を引き取っている。紅葉最後の企画であった『換葉篇』に西男も参加し、紅葉の最後の門下生の一人として、指導を受けていたようである。硯友社の規模の拡大と紅葉の病患悪化による指導力の低下によって、硯友社という枠組みに収まらない作家が出てきた中で、西男が戯作的な作品や花柳小説を執筆し続けたことから、西男自身にも紅葉門下生であるという自負があったのではないだろうか。

また、西男は「耳の底」という作品で、紅葉が逝去する三か月前に見舞いに行っていた様子を書いている。食事もままならない紅葉が、自分の体調よりも、西男が両親を病気で亡くし頼る人がいない状態を心配して以下のような労いの言葉をかけている。

『君の家は商売をしてゐるし、一時に両親を失つたのだから、是から君の責任が非常に重い、緊平やらなければ不可ない、父が残して行つた借金もあるだらうが、其

様事に鬱々¹⁸為るな。』

紅葉が自分自身の体調を差し置いて西男の境遇を心配してくれる優しさに、西男は大変感激し、また胸の引き裂かれそうな気持ちになつたと述懐している。西男は、父親を肝臓癌で亡くし、この見舞いに行く三ヶ月ほど前に、母親を紅葉と同じ胃癌で亡くしている。紅葉にとつても、西男は他の門下生とは異なる特別な、とは言わないまでも、複雑な感情を抱かせる存在であつたと思われる。

紅葉の死後、西男は巖谷小波を頼りに文学活動が続けようとしている。西男が編輯兼発行を務めた滑稽文芸雑誌『笑』では、当初、小波が巻頭を努め、小波門下「木曜会」の一員の多くが雑誌に携わっていた。猪狩章は、小波は明朗温厚で、弟子たちにも寛容であつたため多くの門弟たちが気軽に集まり、さらに博文館の中核として広い顔を持ち、かつ児童文学の商業的成功で大きな権力を持つていたと指摘している。¹⁹西男もまた紅葉没後、小波を頼りに文筆活動の機会を得ようとしたと考えられるが、滑稽文芸雑誌『笑』の誌面上に何度も掲載された木曜会による俳諧には、西男

の名前は見つけられない。⁽¹⁹⁾ また、一九一二(明治四五)年二月に小波が入院、その翌月に退院祝いとして「木曜会」、また「硯友社旧好会」が催されているが、西男はどちらにも参加していなかったようである。⁽²⁰⁾ その他、西男が「木曜会」に参加したという記述は見られず、小波や木曜会に指導を求めたわけではなかったと思われる。

小波以外の硯友社出身の作家で、西男が交流を深めていたのが江見水蔭である。水蔭と西男は「短編小説研究の目的を以て組織せられたる」⁽²¹⁾「短々会」という会合で共に研究等を発表し合っていた。また、『笑』の中で、江見水蔭主催の「ズーフラ会」に西男も参加し、水蔭と西男は親しい仲であったことが紹介されている。⁽²²⁾ 水蔭と西男は、互いに遊芸を楽しむ間柄ではあったが、西男が一〇歳上であった水蔭から文学的指導を受けたというような記述は見られず、また師弟関係であった様子も見受けられない。

大正期に入ると西男は、帝劇や文士劇、歌舞伎役者との交流を深めるようになる。文士劇出でも活躍していた岡本綺堂、岡村柿紅、岡鬼太郎らと『笑』で文筆活動を共にし、西男自身もまた文士劇に参加していた。『今古大番附 七十

余類』という様々なものを番付した表の「文士劇俳優三役番附」の中では、取締役に岡鬼太郎、東の方・横綱に鳥居清忠、東の方・関脇に森暁紅、西の方・関脇に田村西男の名前が確認できる。⁽²³⁾ また、帝劇の俳優たちとの交流について、以下のような新聞記事が掲載されている。

●●●●●
□富士の山荒れ

水蔭氏一家に田村西男君等の先達で帝劇の嘉久子、寿美代、みね子其の他子役、総勢十二人で富士登山と云ふ、之れは問題と聞いて見ると何んだ清華園の富士で一向詰らない、が其の夜急に雨になつて連中ズブ濡れ、何れも大情気、喜んだのは悪口屋で「田西と蛇が這ひ出しちやア大概雨だよ」。⁽²⁴⁾

西男が、水蔭とともに帝劇の女優と子役たちと富士登山に出かけたことを紹介する記事である。同年代の俳優だけではなく、子役たちとも遊びに行くなど幅広く交流を深めていたようである。富士登山に対して「之れは問題」とは、何を問題としているのかの明らかではないが、西男が雨で

ずぶ濡れになっている様子を巻貝のタニシとかけて、「田西」と揶揄嘲笑している様子がわかる。西男が小説家としてではなく文士劇の役者として紹介され、また西男が揶揄されるような滑稽な人物であったという認識が存在していたことが窺える。ほかにも西男を嘲笑する以下のような記事もある。

▲文士劇で儲けた人 先日横浜の文士劇は俳優めい各自数十金の自腹で行つたのだが、此所に一人儲けをした者がある。夫は田村西男クンで、畳屑の小笠原伯から洋酒三壇を贈られたが、(略)今は帝国ホテルにも無い程の逸品で何れも十円以上の代物だとの事に全く仰天した。だが、右の内二壇は人にやる約束をしてつたので、当地人団駄をふんださうだ。⁽²⁵⁾

◇有難や文士劇 田村西男、野崎迂文なんて見せたがりやが横浜座で大猛劇の実演、田西が自作の桜散る頃でメートルを上げると、迂文が弁天小僧で眠さうな啖呵を切つて溜飲を下げる始末に加はらなかつた⁽²⁶⁾(略)

前者は、高い酒を貰つたにもかかわらず、友人にあげる約束をしてしまい、西男が地団駄を「ふんださうだ」という滑稽話である。西男の滑稽な振る舞いを執筆者が創作し、西男を読者に笑われる人物として提示している。後者もまた、西男を「見せたがりや」と揶揄し、「田西」と蔑称の意を含めたであろう呼称を使っている。こうした西男に対する揶揄嘲笑はとりわけ『読売新聞』に多く見られ、西男の評価には偏りが見られる。しかし、その他新聞・雑誌等で西男の役者としての賞賛もまた見受けられず、役者の評価自体が低かつたのでないかと思われる。

管見の限りでは、西男の晩年に関する書誌は、田村西男「冬の月」(『笑』子の第一六号、一九二二・一二)、田村西男「田村秋子の悲しみ―父親の話」(『文芸春秋』、一九五一・八、文芸春秋社)、田村秋子「私の過去・現在・将来」(『新劇』第二卷第一号、一九五五・一、白水社)の三点である。これらの書誌情報から、西男の晩年をまとめたい。

西男は、お茶の水高等女学校を卒業した繁子を妻に迎え、長女・秋子と長男・栄三をもうけた。繁子は栄三を出産し

たあと体調を崩し、二七歳の若さでこの世を去っている。

西男は、生田葵山と市川左團次を介して小山内薫と友人となり、一九二三（大正二二）年ごろ小山内と長女・秋子を引き合わせている。そのあと、小山内薫は新しく築地小劇場を経営するのに、秋子を新劇女優にしたいという旨の手紙を西男に送ったらしい。しかし、手紙は関東大震災でほとんど燃えてしまい残っていないようである。秋子は西男の勧めもあり、また関東大震災に遭って女でも一芸を身に付けないければならないと奮起し、小山内薫・土方与志・友田恭介らの築地小劇場計画に参加、以後舞台・映画女優として活動するようになる。一九二五（大正一四）年、秋子は友田恭介と結婚し、結婚式の媒酌人を小山内夫妻が務めている。結婚披露宴には吉井勇、長田幹彦が参加し、秋子を「あき坊」と呼ぶほど親しみを持っていた様子が書かれている。西男は、そのほかに河東碧梧桐、里見弾、久保田万太郎、菅原卓との交流を深めてもいる。また、里見弾の『宮本洋子』（一九四七・九、苦楽社）は秋子がモデルとなっている。

こうした西男の回想から、大正期以降は特に演劇界や俳優の人物と関係を築いていたことが窺える。また、一九二

五（大正一四）年頃には、「秋子の嫁入支度をさせる事が出来ない」ほど貧乏であり、「そこで多少の金の調達に、安い原稿料でも、手当り次第に原稿を書き初めた」というが、一九一九（大正八年）頃からすでに金銭面で苦労していたようである。^{〔28〕}「安い原稿料」を稼ぐためか、滑稽文芸雑誌『笑』が一九一五（大正四）年以降に終刊（一月号以降不詳）を迎えたあとは、探偵小説など大衆小説にも手をかけていたことが確認できている。^{〔29〕}一九三六（昭和一一）年の『読売新聞』では、西男に関する記事が以下のように綴られている。

「花柳小説家の田村西男さんが、二ヶ月前から、神田明神下にお好み焼で土族の商法」

「黒字か赤字か、サテ・・・」

「うどん粉だらけの手を叩いて、ポケットから本をつまみ出し、お好み焼きを作るせんせいの姿から、経営はうまくいきそうにない。」^{〔30〕}

昭和期に入っても西男は「花柳小説家」と認知されていたが、お好み焼き屋を経営し、「土族の商法」と揶揄され、

「経営はうまくいきそうにない」とまで書かれている。さらに、商売が不発に終わったのか、以降も執筆活動をつづけ、たびたび『演劇界』（一九四六・一一・創刊、演劇出版社）に劇評を寄せ、また『清元名曲選』（一九五四・一〇、鳳山社）など音曲に関する全集を完成させている。

西男は、尾崎紅葉門下として、滑稽文芸雑誌『笑』を編集兼発刊するまでに至った。明治四〇年代には花柳小説家として多くの作品を手がけたが、次第に文壇から離れ、以降演劇界と関係を深めていく。しかし、文士劇の役者としても、劇評家としても名声は得られず、執筆活動は続けるものの文壇・演劇界に埋もれていく作家であった。

二、〈花柳小説〉という文学ジャンル

近代文学の中で、特に明治・大正期においての文学では「芸者」、「芸妓」が作中人物として活躍していることが少なくない。『安愚楽鍋』や『当世書生気質』、『にぎりえ』は吉原に縁の深い小説であるし、吉井勇や長田幹彦は祇園を扱った詩を多く残している。西男の回想によれば、「芸者」

から「芸妓」という表記も使用されるようになったのは明治中期頃であり、「売笑業態」の遊女と、「寄席を待し、歌舞を以って座興を添え」、「伎芸（わざおぎ）」を業務とする女性との区別が明確になっていったという。^{〔31〕}

関良一は、木下彪の『明治詩話』で大町桂月の一文を紹介し、江戸時代の遊女文学（＝娼妓文学）が廃れ、明治期に入って「芸者」文学が台頭してきたことを、以下のように指摘している。

大町桂月の文に曰ふ『明治の時代、正面より云へば、成り上がりの時代なり。側面より云へば、芸者の時代なり。平安朝は姫の時代なり。源平時代は白拍子の時代なり。戦国時代は美少年の時代なり。徳川時代は花魁の時代なり』と。正に其の通りで、明治年間ほど芸者の跋扈した時代は無かつた。徳川時代の社交が吉原に在つた如く、明治の貴顕縉紳は最も多く新橋に集つた。^{〔32〕}

江戸の町人の社交場だった吉原は次第に廃れ、薩長を中心とする地方の士族が新たな社交場として新橋柳橋（二橋）

に集まつたことで、「芸妓」が花柳界の中心となつていった。花柳界の流動に伴つて文学界もまた、「遊女」から「芸妓」を中心とした《花柳小説》が多く書かれるようになった。

成瀬正勝が、「遊女」と「芸妓」が同じ接客婦であつても、「芸妓」は公然と色を売らず「芸妓によつて纏綿とした情緒をかもし出すということのなかに、自由と個性との發揮を許す場が生まれており、これが遊女の衰退と芸妓の繁栄とにつながっている」と指摘するように、「芸妓」には「遊女」よりも恋愛の自由度が高かつたようである。「遊女」も「芸妓」も、男に買われるという受動的な存在ではあつたが、「芸妓」は売春を専業としない分、恋愛の自由を獲得していると捉えられ、文学界においても西洋から輸入された自由精神とともに「芸妓」の存在が歓迎されたものと思われる。

《花柳小説》という言葉がいつごろ出来たのかは定かではないが、永井荷風は《花柳小説》の始祖として岡鬼太郎の名前を挙げている。「明治二十五年以後、硯友社文学の勃興するに及んで小説中に芸妓の現はれ来るものが次第に多くなつた」が、純然たる《花柳小説》と称するに値する

ものは「明治三十年以後岡鬼太郎氏の著作」であると述べている。³⁴江戸の黄表紙・洒落本・人情本に描き出されてきた遊里文学は、紅葉をはじめとする硯友社作家に受け継がれてきた。硯友社出身で、岡鬼太郎と文筆活動を共にした西男もまた、花柳小説家と広告され、多くの「芸妓」を描き出してきた。一九二五（大正一四）年の『読売新聞』には花柳小説家としての西男の評価が以下のように述べられている。

花柳界方面に取材して面白い読物を作る人に森暁紅氏と平山慮江氏とがある。（略）この方面には二人の他に田村西男氏といふ才人がある。不幸にして僕は此人の作をさう沢山読んでゐないので此処では批評を避けることにする。

現代の緑雨たる岡鬼太郎氏や現代の西鶴たる永井荷風氏などを迂闊々々³⁵此中へ入れやうものなら後難の程が恐ろしい。謹んで避けることにしよう。但し大衆物随筆家としては両横綱とでも申さうか。いやこんな事を云ふのさへ既に大なる冒流なのである。³⁵

を輯めたり江戸趣味か墮落趣味か遊蕩鼓吹か読まむと欲するものは読むべし³⁸⁾

西男の作品は「墮落趣味」で「遊蕩鼓吹」であるから、読もうと思うものは読んだほうがいいとする紹介は、西男が一九一一年（大正二年）当時すでに「遊蕩文学」の書き手として認識されていたことが窺える。さらに、一九一三年（大正四年）九月二日に『朝日新聞』で掲載された「劣悪文学の流行（六）」では、西男の名前が確認できる。

▲悲哀小説の流行 低級の悲哀小説が盛に発刊される事も看過すべからざる最近出版界の特異の現象である、「涙」とか「妻の悔悟」とか「後の多情多恨」「多情多恨の手紙」「兄妹三人」「操の告白」「華嚴の嵐」また歌集体にした「歌集悲しき愛」「歌集渾痕」などがある、是等は家庭小説とか、悲劇小説とか或は少女小説杯銘打て居るのが多く田村西男、植松美佐男杯是等赤本作家中の筆頭株である（略）惟ふに一時恋愛小説の流行が教育界の八釜しい問題となり、健全なる家庭の読物の必要が

論議された事があるが、利に敏い群小書肆と低級文士等は早くも一策を案出して特に家庭小説、少女小説などの文字に冠して、さも家庭の読物として相応しい健全な書籍であるらしく装うて居るのだ、正直な地方の読者などは訳もなく此種の劣悪小説に欺かれて了ふ、而して斯種の低級悲哀小説が青年少女の思想上に及ぼす影響を想へば窃に戦慄を禁じ得ないものがある（傍線は引用者による）³⁹⁾

西男の「家庭小説」や「少女小説」とは、おそらく西男が編輯権発行を務めた滑稽文芸雑誌『笑』に掲載された広告や体裁に由来していると思われる。『笑』は小波が「家庭小説」に（笑い）を求めた影響もあって、「青年少女」など特定の年齢層ではなく、「家庭」における全ての年齢層が『笑』を読むことができるよう配慮されていた様子が窺える。⁴⁰⁾ 西男は、「花柳小説」や「花柳情話」という副題をつけて小説を掲載し、「花柳小説」の中で（笑い）を見出し、「家庭」におけるすべて人々に慰謝を与えるような（笑い）を掲載する雑誌として、編輯・執筆していたようである。⁴¹⁾

こうした西男の方針に対して「劣悪文学」であるという批判も存在していた中で、さらに赤木の「遊蕩文学」の撲滅」が拍車をかけ、西男は文壇退却の一途を辿ることになったと思われる。事実、一九一四（大正五）年以降西男の（花柳小説）は『女優鬻』（二九一五・三、誠文堂書店）を最後に発刊されていない。

内田魯庵は回顧録『思い出す人々』（一九二五・六、春秋堂）で、自らを「硯友社の異宗門」と位置付け、『我楽多文庫』（一八八八・五・二五創刊）発刊当時の硯友社について以下のよう^にに批評している。

新しい文芸を叫びつつも時代遅れの化政度の戯作者生活をお手本にしたのが誤りであった。（略）江戸作者の洒落な風は江戸の文化に親しむものの大部分が浸染してゐたので、強ち硯友社ばかりが戯作者風ではなかったのだが、硯友社と思う存分に傍若無人にこの気分を發揮したので、硯友社が単独で戯作者の毀^{そしり}を背負つて了つた

魯庵は、戯作者的気分は「時代遅れ」であつたと回顧しつつ、江戸文化に親しむものの大部分に浸透していたものであり、明治生まれの「青年」を魅了する力が十分にあつたが、硯友社が旧時代的な「戯作者の毀を背負つて了つた」ことで、大正期には「青年」たちは離れ、追憶される対象になつてしまつたと指摘している。西男が、硯友社に属し、一貫して戯作的な作品を執筆したことは、反時代的な行為であり、「青年」、そして文壇から「時代遅れ」で評価に値しない人物として見放されてしまつた。さらに、追い打ちをかけるように、「遊蕩文学」撲滅論を契機に、文壇での執筆機会をも奪われてしまつたといえる。

では、西男はなぜ（花柳小説）に固執し、また『笑』という雑誌のなかで（花柳小説）を掲載し続けたのだろうか。花柳界について、丸谷才一は以下のように述べている。

すなわち花柳界は賈の市民社会といふことになるかもしれない。そこでならば、これもまた究極はまがひものかにすぎないのだけれどもとにかく恋愛が自由であつたし、さまざまな階層、さまざまな職業の男たちが語

りあふこともでき、そのかたはらには女たちがあつた。そして、結局見せかけにすぎないにしても、一種の女性崇拜、一種の男女平等さへあるやうな仕掛けになつてゐた。

丸谷は、花柳界が「男女平等」の疑似空間であつたことを言及し、為永春水ら江戸の戯作者もまた、この空間に気づいて作品を手掛けていただろうと推測している。一九〇三（明治三六）年に大町桂月が、「花柳界は、男子の弱点を現はす処也」で、花柳界の女性は「耳学問」をもつて、一通りの知識を身に付け、多くの男に接しているから、男性を「あしらふことに長じている。」と述べている記述も見られる。

西男は、花柳界が恋愛の自由な「男女平等」の世界であつたからこそ見出すことのできる〈笑い〉を求めていたのではないだろうか。例えば、「赤坂妓聞 鼻の芸妓」〔『笑』卯の第七号、一九一五・七〕という作品は、語り手である「僕」が、鼻の大きな芸妓「喜美勇」を極端に嫌うことで、逆に「喜美憂」の言動に振り回されることになり、「僕」の知らぬ間に「僕」の友人である「岸川」と「喜美憂」が恋仲に

なつていふという話である。鼻の大きい「喜美勇」への〈笑い〉から、最終的には「僕」の潔癖な性格から生じる極端な主観的判断に対する〈笑い〉へと焦点がシフトしていく。人間の「形体の不具、不恰好」を笑うことに対して「不実、残忍なる要素がある」という認識も存在していた中で、西男が「僕」を翻弄する「芸妓」として「喜美勇」という「男名」の芸妓を登場させたこと、また最終的に「喜美憂」が「岸川」を手に入れ「僕」の期待を裏切ること、で、「喜美勇」と「僕」の優劣関係は解消され、「鼻」に対する〈笑い〉をゆるやかに描いている。西男は、男と女のどちらも滑稽人物として描くことのできた〈花柳小説〉の中で、優劣関係を除いた〈笑い〉を表現しようとしていたと言えるのではないだろうか。

〔注〕

1 森銑三「田村西男氏の作品」〔『日本古書通信』、一九五八・三、日本古書通信社〕

2 神保五彌「古典への招待」〔『新編日本古典文学全集八〇 洒

落本 滑稽本 人情本』、二〇〇〇・四、小学館〕

3 大谷篤藏「洒落本礼賛」(『洒落本大成』第一卷月報、一九七八・九、中央公論社)

4 『日本近代文学大事典』(一九八四・一〇、講談社)

5 西男は、「賞状」という作品が第二二年第二四号の『少国民』(一九〇〇・一一)に掲載された後、第一四年第六号(一九〇二・三)に至るまで、「田村西男」または「西男山人」という名で、計二〇回作品を掲載している。『少国民』の出版社は学齢館から北隆館、鳴阜書院へと変遷しているが、鳥越信の調べを参照すると、第二三年第一号(一九〇一・一)の広告最終ページに、北隆館のスタッフの中に西男の名前が確認できる。(鳥越信『児童雑誌「小国民」^{キョウミン}解題と細目』、二〇〇一・一、風間書房)

6 田村西男『半玉』(一九二一・一一、辰門館)巻末掲載広告

7 『日本近代文学大事典』(注4に同じ)で、西男の欄を担当したのは、演劇評論家として知られる藤木宏幸である。

8 尾崎紅葉の「十千万堂日録」は、一九〇一(明治三四)年一月から一九〇三(明治三六)年一〇月、その逝去の月の初めで、晩年三か年の日記である。

9 一九〇一(明治三四)年に伊臣紫葉、星野友人、田村西男、鈴木苔花らにつづき、瀬沼夏葉、新井雨泉、篠原嶺葉、山田水

葉らが相次いで入門している。紅葉は、巖谷小波宛の書簡に「入門を乞ふ者の陸続たるは何の故かと驚かるる」(一九〇一・三・一〇)、「いかなる風潮にや、本年に入りて入門者の多きこと驚くばかり」(一九〇一・三・二六)と、その胸中を綴っている。

10 一九〇一(明治三四)年七月二十九日、瀬沼夏葉宛書簡

11 一九〇一(明治三四)年四月二十七日、巖谷小波宛書簡

12 一九〇一(明治三四)年三月二十六日、巖谷小波宛書簡

13 注12に同じ。

14 紅葉には入門順に北田薄氷、田中夕風、瀬沼夏葉の女性門下生がいた。一九〇一(明治三四)年三月八日の瀬沼夏葉宛書簡で、紅葉が夏葉に雅号の候補を送っていたことがわかる。また、その日の日記(注8と同じ)に、「瀬沼郁子(桔梗女史)に夏葉の号を与ふ」と記されている。

15 一九〇二(明治三五)年三月にツルゲーネフ著「投書家」「石」、同年四月に「神の宴」を『新小説』(春陽堂、明治二二・一創刊)で発表。紅葉は「紅葉山人閑」という形で共訳している。

16 江見水蔭「自己中心明治文壇史」(『太陽』、一九二六年二月(第三二卷第二号)から一九二七年九月(第三三卷第一号号)

にかけて掲載、博文館)。引用部分は「十三 大洋に出て」(第三三第二号、一九二七・二)原稿である。原稿は、早稲田大学の古典籍総合データベースに公開されている。

17 田村西男「耳の底」『卯杖』第一巻第一号、一九〇三・

一一、秋声会出版部)

18 前出「田村西男氏の作品」(注1に同じ)

19 木曜会「俳諧 羽子音」『笑』第三巻第四号、一九〇九・

(二)では、木曜会が箱根・環翠楼で開催した新年会の様子が書かれている。黒田湖山、永井荷風、宮川春汀の名前は確認できるが西男の名前はない。創刊当初の『笑』にたびたび登場する木曜会による俳諧欄でも、西男の名前は確認できない。

20 小波は一九一二(明治四五)年二月にチブスにかかり入院している。「木曜会」には西村渚山、湖山、生田葵山、久留島武彦、春汀、岡野栄ら一名が参加しているが、退院祝いと関わらず、その前から三・四回集まって遊んでいた仲だと述べている。また、「硯友社旧好会」には水蔭、石橋思案ら五名が参加し、いつもなら広津柳浪や丸岡九華が揃う会であると述べている。

(巖谷小波『小波身上嘯』、一九一三・四、芙蓉園)

21 無記名「短々会発会」『朝日新聞』、一九〇四・八・八・朝

刊五面)参加していた会員は「江見水蔭、谷活東、竹貫佳水、万代花舟、林玄川、田村西男、瀬戸半眠」の七名で、欠席者は「池田錦水、柳川春葉、栗島狭衣」の三名であった。

22 無記名「笑報珍聞」『笑』第二巻第四号、一九〇八・二)

では、ズーフラ会が活人画、手品、劇、相撲などをして楽しんだという記述がある。また、田村西男「冬の月」(論文中)の中で、毎月ズーフラ会が西男の三宜亭で行われ、西男の妻・繁子もズーフラ会の遊劇に参加していたことが確認できる。

23 無記名「文士劇俳優三役番附」(東京番附調査会編『今古大番附 七十余類』、一九二三・四、文山館書店)

24 無記名「演芸あざぎ幕」『読売新聞』、一九一三・八・二七・朝刊六面)

25 無記名「演芸あざぎ幕」『読売新聞』、一九一八・六・二六・朝刊六面)

26 無記名「演芸あざぎ幕」『読売新聞』、一九二〇・四・二七・朝刊六面)

27 西男の回想記に登場する長田・吉井・久保田は、一九一四(大正五)年八月六日および八日の『読売新聞』に掲載された赤木桁平「遊蕩文学」の撲滅」で批判の対象として名指しされ

た人物で、小山内は赤木の論に反論した人物である。

28 田村西男「田村秋子の悲しみ―父親の話―」（前出）

29 森曉紅『お誂しなじな―珍な話妙な話変な話』（一九二二・七、ライト社）の巻末広告の中で、西男の『捕り縄』（一九二二・五、ライト社）は、「江戸時代の大犯罪」を描き出し「読者を昏迷せざんば止どまぬ」作品と、『探偵の眼』（不詳）は、「科学的犯罪捜査の完備しなかつた江戸時代の手先岡引の苦心」を描写した作品と紹介されており、江戸時代を舞台にした探偵小説を書いていたことがわかる。

30 無記名「新版 土族の商法・出納簿」（『読売新聞』、一九三六・一一・四・夕刊五面）

31 田村西男「芸妓礼賛」（『花柳界』第一卷第三号、一九五六・

三、住吉書店）

32 関良一「吉原」（『国文学』第九卷第二号、一九六四・一、学燈社）。本論文のために引用文に提示されている大町桂月の文章を調査したが、見つけることが出来なかった。

33 成瀬正勝「芸妓」（『国文学』第九卷第二号、一九六四・一、学燈社）

34 永井荷風「岡鬼太郎氏の花柳小説を読む」（『冬の蠅』、一九

三五・四、丸善株式会社）。小説中の芸妓について岡保生もまた、

紅葉をはじめとする硯友社の同人たちが玄人の女たちを巧みに書けるようになったのは、吉原での体験を積んだ「明治二〇年代後期以後のことに属する」と述べている。（『花柳界』という文学空間―明治二十年代初期の硯友社―『国文学解釈と鑑賞』第四五巻第五号、一九八〇・五、至文堂）

35 国枝史郎「大衆文壇鳥瞰…」（三）曙山、暁紅、慮江、西男氏等と前途有望な高桑義生氏」（『読売新聞』、一九二五・四・二二・朝刊四面）

36 白石実三「雑誌月評」（『文章世界』第六卷第一六号、一九一一・一二、博文館）

37 前出「田村西男氏の作品」（注1に同じ）

38 無記名「新刊雑書」（『朝日新聞』、一九一一・一・一二・朝刊六面）

39 無記名「劣悪文学の流行（六）／▽現代的趣味の中心／▽仮面せる家庭小説／▲芸妓論と女優論」（『読売新聞』、一九一

三・九・二・朝刊五面）

40 『笑』卯の第一号（一九一五・一）に掲載された、『笑』臨時増刊『婚礼夜話』（一九一五・一・一五）に対する広告では、

「お母様もお婆様も、令嬢も娘さんも、みいちやんも、きいちやんも、これを読んで思出を新たにしたり、又たやがて来るこの夜の美しさ（引用者注―新婚初夜）をお味ひください」と書かれている。また、小波は「愉快な家庭」（『笑』第三卷第一号、一九〇九・一）という演説を思わせる作品の中では、「夫も妻も、親も子も、真に笑ひ得る家庭こそ、真の愉快な家庭でもあり、『笑』は実に健康体から発作」するため、「家内中が健康であるのが一番だ」として、その手助けとなるのが『笑』であると述べている。

4 1 『笑』の中で比較的巻末に置かれる雑評に「▲『笑』の立場は、もとより人生のつかれやすめ、煙草がはりとして人に慰藉を与へん事を期にする所に有^{こゝろあり}之候。」（郊外漢「ワラヒ便」、『笑』第三卷第二号、一九〇九・一〇）という記述が見られる。

4 2 丸谷才一「花柳小説論ノート」（『吉行淳之介全集』第七卷解説、一九七二・一、講談社）

4 3 大町桂月「花柳界の女性」（『文芸倶楽部』第九卷第一五号、一九〇三・一〇、博文館）

4 4 一閑人という人物による「笑の科学的研究」は、『読売新聞』

で一九〇六年七月三日から同年一〇月一八日まで計六四回連載された。引用部分は一九〇六年八月一二日朝刊五面の第二一話「三 笑の種類（つゞき）」である。

4 5 男名の芸者は、幕府の公許を受けていた吉原以外の色町・宿場・歓楽地等の岡場所で、役人の目をごまかすために芸者を男名前にして雇人としたと言われている。（凡平『江戸の花街』遊郭）がわかる（二〇〇五・九、技術評論社）また、岡場所の代表とされる深川で、豪華に着飾る花魁に対抗し、男装であった羽織を用い、売春をせず、意地と張りな態度で接客する深川芸者に由来して、男名前を付けることもあったと指摘されている。（中野栄三『廓の生活』、一九六八・六、雄山閣出版）

〔本文引用〕

『紅葉全集』第一卷（一九九五・一、岩波書店）

『紅葉全集』第一二卷（一九九五・九、岩波書店）